いずみさの昔と今 第314回

「戦前の佐野町商店街」

前号に引き続き、現在開催中の歴史館いずみさの冬季企画展「むかし なつかし 昭和のくらし」に関連して、昭和時代の泉佐野と人々のくらしを振り返ります。第2回目は、佐野町場の商店街の様子やその変遷について、戦前を中心に見ていきましょう。

佐野町場の商店街が現在の姿になる礎が築かれたのは、明治30（1897）年に南海鉄道（現南海本線）の難波～佐野間開通に伴い佐野駅が開設されて以降、特に大正時代から第二次世界大戦以前のことです。佐野駅開設以前の佐野町場は、港を基点とした海運業が商業活動の中心であったことから孝子越街道より浜側が中心街であり、特に旧車町・旧大将軍町・下往還に商店が集中していました。

しかし、佐野駅が開設されると、流通機能が鉄道に移り、駅を中心に繊維工場やその寮が設立されたため、駅周辺が繁華街として栄えました。その中心は、駅舎開設と共にできた駅前通り商店街と、その南側一帯の新地（旧高松町域）です。なお、現在佐野町場の中心的な商店街となっている孝子越街道の商店街が本格的に栄えたのは戦後のことでした。

時代と共に姿を変えてきた佐野町場の商店街について「泉南佐野町商店街訪問双六」（歴史館いずみさの所蔵、現在展示中）により、戦前の商店街の姿をうかがい知ることができます。当資料は、かつて新地に存在した映画館の電気館が昭和10（1935）年に発行した双六で、当時佐野町場に店を構えていた商店の名前と場所が掲載されています。

中でも、6店舗も掲載されている「カフェー」の存在は花街として栄えた戦前の新地の姿を色濃く反映しています。戦前の「カフェー」は喫茶を楽しむ現在のカフェとは違い、食事と酒類が提供され、女給が接客を行う点に特徴がありました。掲載店舗のうち、昭和8（1933）年頃開業の「カフェーエイト」は佐野で最初にコックを雇った高級レストランであり、チキンライスなどの洋食、洋酒やビールも提供されていました。加えて大阪から雇われた美人ぞろいの「女給さん」が接客にあたったことで評判を呼びました。

なお、同店は戦争の影響を受け、昭和19（1944）年に廃業しています。

「カフェー」のほか、新地には料亭や茶屋が多数店を構えており、店ごとに芸妓を抱えていました。かつての新地の中心街は若宮地蔵尊の前を通る道であり、石畳で舗装された情緒漂う道でした。戦前はこの道沿いに茶屋や置屋が立ち並んでいたといい、当時の新地がまるで京都祇園のような雰囲気を持つ街並みだったことが想像されます。

▶泉南佐野町商店街訪問双六（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

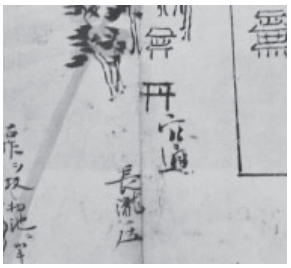
日本遺産・中世日根荘を巡る㉛

～番外編「蟻通神社」～

JAPAN HERITAGE 日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課



◀日根野村絵図に記された「穴通」「長瀧庄」

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）

現在の蟻通神社

長滝地区の鎮守である蟻通神社（ありとおしじんじゃ）は、令和3年に日本遺産「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち－中世日根荘の風景－」の構成文化財に追加されました。建物の多くは国登録文化財となっています。

旧陸軍明野飛行学校佐野分校建設に伴い、昭和17年に現在の場所に移築された経緯がありますが、当初の場所は約700年前（鎌倉時代）の二枚の絵図に描かれています。正和5（1316）年の「日根荘日根野村荒野絵図」には「長瀧庄」「穴通」が、延慶3（1310）年頃の「日根荘日根野・井原両村荒野絵図」には「長瀧庄」の文字と3本の松が描かれています。二枚の絵図は日根荘の荒野の所在地を示そうとしたものですが、これらの表記はすべて荘園の境界を示すものと考えられています。

平安時代には古今和歌集の選者であった紀貫之が熊野詣での帰りに神社の前を通り過ぎようとした際に馬が倒れ、神様に歌を詠んでお祈りするとたちまち馬が生き返ったという伝承（その時に紀貫之が冠を落としたのが現在の「冠の渕」跡）や、「枕草子」で清少納言が無理難題を解いた孝行息子の説話が広がりました。また室町時代には、能楽師世阿弥が「謡曲蟻通」を上演したことでも神社の信仰が深まりました。現在も舞殿において「ありとほし薪能」が盛大に催されています。